

日曜日のドイツ

法学部助教授 堀江 亜以子

筆者は2005年の8月末より1年間、在外研究のためドイツ・ミュンヘンに滞在した。達者というには程遠いドイツ語と格闘しつつ過ごした1年間には、当然、辛いことも楽しいことも多かったが、印象深い出来事はなぜか日曜日と結びついていることが多い。そこで、「日曜日」をキーワードに筆者のドイツ生活をちょっとだけ綴ってみることにした。ちなみにタイトルが有名な女性アナウンサーのエッセイと似ているのは単なる偶然である。

ドイツに到着して、最初にインパクトの強かった日曜日は9月18日。選挙でCDUが勝利し、ドイツ初の女性首相が誕生……もだが、それ以上に身近な出来事は、世界的に有名なビールの祭典 Oktoberfest (オクトーバーフェスト)の開幕と、その日から数日、突然寒波に襲われて最高気温が10 にまで下がったことだ。実際にはその前日が開幕日なのだが、2日目に行われる最も壮麗かつ大規模なパレードを見に行ったものの、最後まで見ていることができない程の寒さと、それに対応できるような厚手の服がない辛さ。出発前が非常に忙しく、引っ越しの準備等々がすべて後手に回ってしまい、荷物を送るのが遅かったのが最大の原因だが、日本人の平均に比較してもかなり小柄な筆者にとって、その後一年に渡り、最も苦勞したのが衣料品の調達だった。大人用の物の大半は大き過ぎ、子供服ではデザインが幼過ぎ……その中でも、特に困ったのは下着類だった。1年間帰れないが故に1年間買えない。帰国して真っ先に行った

のが、デパートの下着売り場だった、という後日談までつく有様。これが男性だったら、ここまで苦勞しなくて済むように思う。

とはいえ、日曜日には良い事もある。その代表が美術館だ。Pinakotheken(ピナコテーク群)と呼ばれる、ミュンヘンの誇る大美術館群が自宅から徒歩5分という、美術好きの筆者にとってこの上ない住環境。部屋自体にはかなり不満があったのに、結局引っ越さず終いだっただのは、この美術館も大きな要因であった。何より驚くのは、日曜の入場料がたったの1ユーロということだ(通常は5.50ユーロ)。そのせいか常設展であってもいつも程良く賑わっている。他にも小規模な美術館には、日曜入場無料の所すらある。日本にいるとつい、日曜は買い物に走ってしまうが、悪名高き(?)閉店法のおかげで、飲食店と文化施設くらいしか開いていない事もあって、まさしく文化的な生活が送れるようになっているのだった。

ちなみに、その閉店法のおかげでドイツではデパートもスーパーも日曜・祝日はお休み。平日も夜8時までで閉店。加えて、閉店法のせいではないが、祝日ではないクリスマスイブや Faschingdienstag (ファッシングの火曜日)の午後もほとんどの店が閉店。日本では当たり前にある年中無休24時間営業のコンビニなんてどこにも見当たらない。一応、主要駅の売店や、ガソリンスタンド併設のミニストア等の例外はあるものの、旧市街のど真ん中まで徒歩圏内という筆者の住環境では、むしろ、近所にガソリン

スタンドがなかった。日曜閉店という点だけ言え、それまでスペインやイタリアなど、カトリックの伝統が根強い国に旅行する機会が多かった為、ある程度慣れてはいた（というか痛い目に遭った事がある）のだが、そんな筆者でも日曜閉店のせいで困った出来事はあった。

ある日曜の朝、起きたら、バスルームの蛍光灯が切れていたのだ。バスルームの照明はその蛍光灯のみで、窓もなく、ドアを閉めたら真っ暗闇。普段、蛍光灯や電球が切れたときには、宿舍のオフィスに行けば新品を出して貰えるのだが、ドイツの標準というか、オフィスは金曜の14時過ぎから日曜いっぱいお休みだ。かといって外で蛍光灯を売っているところもない。このときばかりはさすがに閉店法が恨めしかった。もっとも、普段から電球類も自分で賄う生活をしているならば、最初から予備をストックしておけば済む話なのだが。

しかし慣れてしまえばそんなに困らない。大体、私がまだ子供の頃はそんな生活していたのだ。日本に帰ってからしばらくは、スーパーが遅くまで開いている事に違和感を覚えたほどだ。少なくとも閉店時間に間に合うように帰れる状況にあるならば、ちょっと不自由なくらいでも構わない。話が少々ずれるが、瓶やペットボトルを返却するとデポジットが戻ってくる制度に慣れてしまうと、日本で資源「ゴミ」として「捨てる」のは勿体ないと思ってしまう。日本ももっとデポジット制度を導入すればいいのに。イベント時に外で飲むビールは、ガラスのジョッキに入っている方が遥かに美味しい。

話を戻して、そんな厄介者の閉店法も、Weltmeisterschaft（ワールドカップ）を前に緩和され、各自自治体ごとに独自の運用が可能となった。まずはWM開催期間中の日曜日に店が開けられることになった。ミュンヘンでの日曜営業は6月18日。何故に18日？

そう、その日はミュンヘンのアリアンツ・ア

レーナで、ブラジル対オーストラリア戦が行われる日だったのだ。当然のことながら、常に世界のトップに君臨するブラジルを応援するために、ブラジル人サポーターが大挙して押し寄せるだろうし、もちろんオーストラリア人サポーターも続々とやってくる。WM期間中、最も人が増える日曜日に店を開けようという計画だ。

しかし実際のところ、ブラジリアンもオージーも、街を練り歩いたり、歌い踊ったり、そこいらのテーブルでビールを飲んだりするばかりで、店の買い物客はほとんどがドイツ人だった。確かに、これから試合という時に、洋服や靴を買うサポーターはいないだろう。単に閉店法の見直しをWMにこじつけただけかもしれない。

なお、WM開幕のしばらく前から、ミュンヘンの街には徐々にブラジル人の姿が増えてきていた。他方、オージーも試合の数日前から、ミュンヘンのそこここでビールを飲みつつ、にわか街頭TVを見ている姿をよく見掛けるようになった。しかもオージーに特徴的なのは、引退後の高齢者が多いことだ。彼らはゆったりとWMを楽しもうとやってくる。それに比べて、後日、観戦ツアーでやってきた、大学の先輩に日程を聞いたら、日本人は何故こうも余裕がないのだろうかと、驚く程タイトなスケジュールだった。それでも休みを取れただけ幸運だという。確かに、私だって2010年や2014年は見に行けないだろう。

ドイツ人に言わせれば、フランス人は6週間も休暇があるのに、ドイツ人は3週間「しかない」そうだ。日本の夏休みは大抵1週間+αですよ、と説明したら、それは休暇とは言わない、と笑われてしまった。そんなどこか余裕のあるドイツの生活を垣間見てしまったせいで、最近、日本の生活がちょっと窮屈で仕方がない。

アメリカの思い出

経済学部助教授 李 明 哲

大学時代の夢

1980年代、中国の大学で勉強していた私は、大学卒業後にはアメリカへ留学することを強く希望していました。しかしながら、89年に勃発した「天安門事件」によって、私が抱いていた夢は叶わなくなってしまいました。非情な運命に翻弄された私は、やむを得ず、第2の道として、日本への留学を選んだという過去があります。

あれからちょうど15年経った昨年8月に、私は、大学より1年間の在外研究の機会を与えていただきました。そして私は、意外な形で、「15年前の夢」を実現することとなったのです。

アメリカへ

目的地がアメリカの東海岸であるため、私は、時差に慣れていない家族のことを考え、経由地のシカゴで1～2日休んだあと、再び目的地を目指すことにしました。出発当日は、朝早くに福岡を発ち、成田で一休みしたあと、予定通り、シカゴに向かいました。10時間を越える長い旅でしたが、このときは、家族全員が興奮していたせいか、思ったほど時間が長いとは感じませんでした。

しかしながら、「夢みる興奮」もここまでで、アメリカに入国した途端、私たちはすぐに、「現実の厳しさ」に直面しました。まずは空港での荷物検査の厳しさです。日本を発つときには13個もの荷物を預けましたが、日本では、なんら問題なく無事に通関し、これらの荷物を飛行機に載せることができました。しかし、アメリカでは13個もの荷物を飛行機に載せるには何百ド

ルもの追加料金の支払いが必要であることがわかり、慌てて私は、急遽、シカゴで予定を変更し、家族全員で飛行機の代わりに車を借り、目的地まで移動することにしました。

結局、シカゴでは時差の調整などで体を休めるどころか、レンタカーの手続きなどでパタバタしてしまいました。また、シカゴを出た後には、風土や運転にもまだ慣れていないアメリカの大地で私は、はじめて、丸一日かけたドライブを経験するはめになりました。そして、目的地であるバッファローに辿り着いたときには、もう夜中で、家族全員が精神的にも身体的にもボロボロな状態でした。

Buffalo と Willamsville

ニューヨーク州の西北部に位置しているバッファロー市は、人口約1,900万を有するニューヨーク州のなかでニューヨーク市に次ぐ大都市です。この地にあるナイアガラ川は、ナイアガラの滝を經由してオンタリオ湖に流れ込みます。そのため、バッファローはアメリカにおけるナイアガラ観光の基地としても有名です。

また、昔、ここは大変重要な工業都市として注目を浴びてきましたが、近年では、ハイテク化やIT化という時代の流れに遅れをとってしまい、古い工業都市のイメージしか残っていませんでした。

実際、バッファロー滞在の初日は、ダウンタウンのホテルで過ごしましたが、雨のせいもあり、本当に暗い感じに溢れていました。

渡米する前に、駐在する大学をいくつか挙げ

ていたのですが、ある友人に「アメリカは、研究するなら東、遊びなら西」とアドバイスを受け、私は研究者として、1年間を楽しみたいとの思いから、アメリカの東側にあるニューヨーク州立大学バッファロー校を選びました。しかし、このときはさすがに後悔しました。せっかくの1年を、こんな暗い感じのするところで住むことになるなんて……。さすがに家族には申し訳ない、と思いました。

しかし、翌日、私たちが住む予定の Williamsville というバッファロー郊外の町を訪ねたとき、状況は一変しました。青い空の下、延々と続いている緑の絨毯、あちこちに飾られてある花々など、実に美しい田園風景に感動しました。バッファローにこんな美しいところがあることにびっくりしたと同時に、内心の喜びも隠せませんでした。妻と娘も昨日の心情がうそのように、一日中目が輝いていました。そうして、私たちのアメリカでの生活が始まったのです。

研究と生活

ニューヨーク州立大学バッファロー校は1846年に開学され、64のキャンパスからなるニューヨーク州立大学のシステムでは、規模が最も大きい、中心的な存在となっています。この分校は「南北」二つのキャンパスに分けられていて、私はバッファロー郊外に新しく建てられ、とてもきれいに整備されている「北キャンパス (North Campus)」に通っていました。私に割り



当てられた研究室は Bell Hall という建物内におかれています。その隣には、この大学に私を招いてくださったインド出身の Rajan 教授の研究室があり、いろいろな意味でとても便利でした。私がバッファローに着いてまもなく、Rajan 教授は、大学院の重役に任命され、とても忙しい日々を送っていました。しかしながら、彼はそれにも関わらず、私の学科での講演の機会を設けていただき、また、毎週1回は、研究の打ち合わせを行うなど、積極的に相互交流を深めていきました。Rajan 教授のおかげで、とても有意義な共同研究生活を送ることができたと思います。この場を借り、改めて、Rajan 教授には、心よりお礼申し上げます。

私たちが借りた家は、学校から車で約15分のところにあります。ここを基点に私たち家族は、秋には紅葉、冬にはスキー、春と夏にはドライブとピクニックを満喫することができました。妻の仕事の関係上、私たち家族は、アメリカに行く前から、ずっと離れ離れの生活が続いていましたし、現在もその状況は続いています。そのような意味で、アメリカでの生活は、私たちにとって、一生忘れられない、大変楽しい1年間でした。

今、振り返ってみると

アメリカには、雄大な自然、自由と個性あふれる人々など、魅力を感じさせられるものがいっぱいありました。私は、このアメリカで多くの貴重な体験をすることができました。このような機会を与えていただいた福岡大学、並びに経済学部の先生方に心より感謝しています。「夢をありがとう」と。

またその一方で、なかなか馴染めなかったアメリカン料理や、なかなか慣れなかった西洋文化のことを考えると、「夢は所詮夢」で、現実的には、やはり日本でよかったとも今は思っています……。

ドイツ・ハイデルベルク大学での在外研究を終えて

スポーツ科学部講師 藤井雅人

ドイツ・ハイデルベルク、世界中の旅人を魅了してやまない、このネッカー河畔の美しい大学町で、私は2005年9月から翌年8月末までの1年間を過ごした。その間、1386年に創立されたドイツで最も古いルブレヒト・カール大学、通称ハイデルベルク大学のスポーツ科学研究所に客員研究員としてお世話になった。実は、私は1990年代に一度、ケルンというドイツ北部の人口100万人を超える都市に生活し、ドイツ唯一のスポーツ単科大学であるケルンスポーツ大学で学んだことがある。今回のドイツ滞在では、その時とは違った環境に身を置きたくて、南ドイツにある人口約14万の小都市ハイデルベルクに住み、そして、ハイデルベルク大学という総合大学の中のスポーツ科学研究所で研究生生活を送ることにした。

ドイツの青少年スポーツの研究に取り組んできた私は、今回の滞在では、その最新の状況を把握したいと考えていた。というのも、私は既に、以前のドイツ滞在中に収集した資料を用いて、1970年代以降のドイツ社会の変化と地域スポーツクラブや学校スポーツにおける青少年スポーツの状況およびその変化との関連性を明らかにしていたが、そこでの研究成果は1990年代半ばまでの時期を対象とする限定的なものであって、1990年代終わり以降の状況を十分反映していないと自覚していたからである。そこで今回は、近年のドイツの青少年スポーツの新しい動きに焦点を当てて研究を進めてみようと思っていた。例えば、私がお世話になったハイ

デルベルク大学スポーツ科学研究所が現在力を入れている、大学・地域社会・学校を連携させた「バルシューレ(Ballschule: Ballschoolの意)」プロジェクトの開始、地元でのワールドカップ開催を控えていたドイツサッカー連盟による大規模なタレント育成プログラムの展開、旧東ドイツの国際競技力を支えた「青少年スポーツ学校」の改革・再編およびドイツ全土を網羅する新しい「エリートスポーツ学校」システムの構築といった動きは、そうした私の意図と合致した恰好の研究調査対象となった。私は研究を進める際の手法として主にスポーツ組織・現場でのフィールドワークを用いているのだが、今回の滞在中に上記の新しい動きの中の非常に多くの個別事例をそうした手法によって調査することができた。今後それらの調査事例から得られた知見を研究成果として公表していくという課題がまだ残ってはいるものの、今回の滞在ではとりあえず、ドイツの青少年スポーツの最新の状況を捉えるための基礎的作業はおおむね終えることができたように思う。

ところで、私はこうした研究面での具体的な目標とは別に、今回ドイツである一つの目標を密かに立てていた。それは、スポーツ社会学を専門とする者として、2006年6月から約1ヶ月間地元ドイツで開催されるサッカーワールドカップ(もちろんその準備期間も含めて)が、このドイツ社会にどのような影響を及ぼしていくのか、また、ドイツ社会の何がそのワールドカップに映し出されていくのかを自らの生活体

験を通して知りたいということであった。ただし残念ながら、本大会が始まると結局は一人のファンとしてワールドカップというビッグスポーツイベントを単純に楽しんでしまったために、そうした目標は殆ど達成できなかったのだが…。それでもやはり、いくつかの現象が深く印象に残ることとなった。私が住むハイデルベルクは、いわゆるワールドカップの「開催都市」ではないし、ドイツでは珍しい「ラグビーの町」であり、サッカーへの熱狂度という点では日頃それほど高いとは感じていなかったのだけれども、ワールドカップ本大会でドイツ代表チームが勝ち進むにつれて、町中にドイツ国旗があふれかえてきたのには本当に驚いた（もっとも、こうした現象はハイデルベルクに限らずドイツ中に見られたのだが）。私はちょうど、ワールドカップ開幕に合わせて出版した『ナチス第三帝国とサッカー』（現代書館）の翻訳作業を終えてまだ間もない頃で、ドイツのサッカーがいかにナチス政権に協力的であったのが心に刻み込まれていたために、こうした「ナショナリズムの高揚」とも捉えられかねないような現象をどのように解釈すればよいのか戸惑っていた。そんな折、ワールドカップ期間中に参加した学会で、偶然に年配の女性教授と若い女性研究者とのある興味深い会話を聞くことになる。それは、年配の教授による「ドイツ中に国旗がはためいているのは何か危険な感じがするわ」という言葉に対しての、若い研究者による「私はドイツという国を愛しているの。その気持ちを表したいの。今やっと私たちにそんな気持ちを表現できる時が来たの。私はドイツの国旗に誇りを持っているわ」という反論であった。つまり、こうした国旗をめぐる現象は、あるドイツの政治家が述べたように「ナショナリズムではなく、パトリオティズム（愛国心）の表現」ということであろうか。何にしても、ワールドカップというイベントが、もっと言えばそこでのドイツ

代表チームの快進撃が、ドイツという国家やその国旗に対する戦後のドイツ人の鬱屈した感情を解き放つ、全ドイツ的な大きなうねりを生み出したといえそうである。そうした意味で、今後このワールドカップが、ドイツ人の意識を大きく変えたエポックメイキングな出来事として語り継がれていくのかもしれない。

今このハイデルベルク大学スポーツ科学研究所での在外研究期間を振り返れば、学会やシンポジウムへの参加、研究者との交流、さらには事例調査や専門家へのインタビューのためにドイツ全土を訪ね歩いたように思える。したがって、実はあまり研究所に腰を落ち着けて研究活動を行った気がしないのである。それでも、多くの先生方に助けていただいたおかげで、ドイツでは非常に充実した日々を過ごすことができた。特に受け入れ教授である研究所長のハイム先生には、多くの授業に参加させていただいたり、また研究を進める上での貴重なアドバイスをいただいたりした。ハイム先生には心から感謝する次第である。ハイム先生の授業に参加することは、自分自身がこれまで行ってきた授業を振り返る良い機会となった。特に今回学生の側に立って授業を受けてみたことにより、授業内容が分からない学生の気持ちや、集中して授業を聞いていても眠くなってしまうのはがゆさ、ノートに書き写す前にスライドを切り替えられることの腹立たしさなど、自分自身が今後授業を行う際に気をつけなくてはならない点を改めて理解できたことは大きな収穫であった。

最後になりましたが、素晴らしい在外研究の機会を与えてくださった福岡大学、また、スポーツ科学部教授会に心より御礼申し上げます。